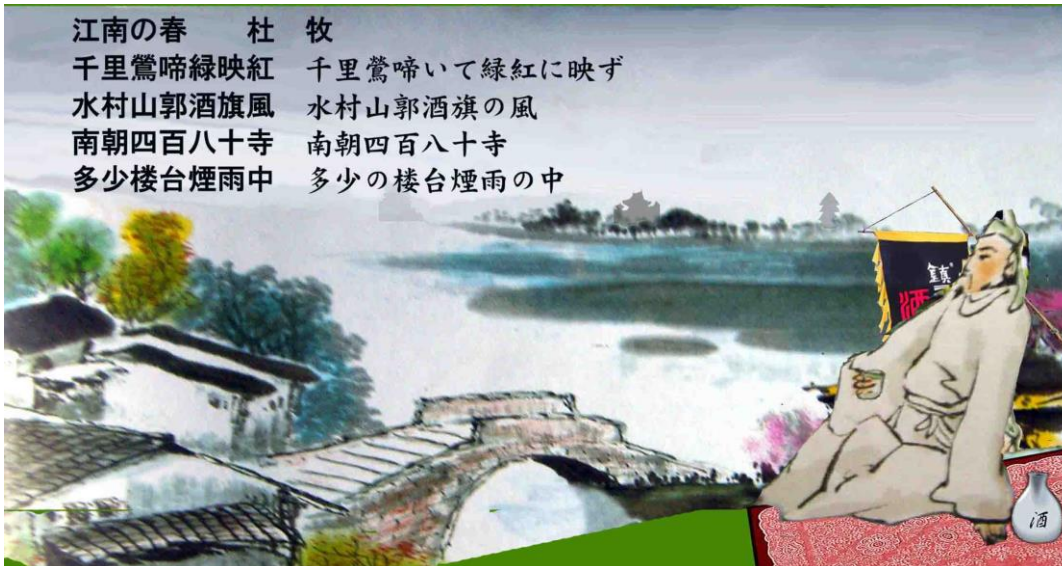


江南の春	杜 牧
千里鶯啼緑映紅	千里鶯啼いて緑紅に映ず
水村山郭酒旗風	水村山郭酒旗の風
南朝四百八十寺	南朝四百八十寺
多少樓台煙雨中	多少の樓台煙雨の中



漢詩を 訪ねる旅

A 武漢市 黄鶴楼

江西師範大に赴任していたある年の春に武漢市を訪問した。長江流域の中で桜の名所とされる武漢大学では、桜が既に散っていたが、武漢市には是非訪れてみたい「黄鶴楼」と「武漢長江大橋」がある。

黄鶴楼は黄鶴伝説や李白の詩でよく知られている。楼閣内には、とりたてて見るべき物があるわけではなかったが、最上階から眺める長江は春霞に烟っていた。

次に、黄鶴楼からも遠望できた「武漢長江大橋」へ行ってみた。

私は、橋のたもとから、対岸や下流を眺めた。李白が「黄鶴楼送孟浩然之広陵」を作詩した季節は旧暦の3月だから、ちょうど今私がいるときと同じだ。長江は春霞でぼんやりとかすんでおり、遙か下流が天空と一体となっている様は、李白が描いた情景とまったく同じだった。



黄鶴楼

黄鶴楼送孟浩然之広陵 李白

黄鶴楼にて孟浩然の広陵にゆくを送る 李白

故人西辞黄鶴楼	故人西のかた黄鶴楼を辞し
烟花三月下揚州	烟花三月揚州に下る
孤帆遠影碧空尽	孤帆の遠影碧空に尽き
唯見長江天際流	ただ見る長江の天際に流るを



春霞にけむる長江

千数百年の時空を超えて、長江は今も往時と変わりなく滔々と流れている。私は、まるで作詩している李白の傍に立って眺めているような気分だった。

B 現地に住んで深まる漢詩への理解

昔、NHKのシリーズ番組『シルクロード』で、作家の陳瞬臣氏が、咸陽市（唐時代には涇城と呼ばれる）の涇水の畔に立ち、王維の名詩を解説している場面があった。

送元二使安西 王維 元二の安西に使用するを送る 王維

涇城朝雨潤輕塵	涇城の朝雨輕塵をうるおし
客舎青青柳色新	客舎青青柳色新たなり
勸君更盡一杯酒	君に勸む更に尽くせよ一杯の酒
西出陽關無故人	西のかた陽關を出ずれば故人無からん

唐の時代、都人は西へ旅する親戚・友人と郊外の涇城まで同行し、そこで別れる習慣になっていた。王維は友人の送別を上の方の詩で描いている。

ところで、日本の子供は太陽を描くときには、真っ赤な色にする（日の丸のように）。しかし、沙漠民の子供なら、太陽を黄色に塗りつぶすそうである。これは、気象条件の違いによるらしく、子供は見たとおりに描くか、あるいはその民族の太陽に対する固定観念の影響でそうするのだろう。

私が中国での最初の赴任地西安市に来て気付いたことは、晴天にも関わらず、空がぼんやりと霞んでいて、太陽が黄色に見えることだった。それは、中国の他の都市でもあるような、公害による大気汚染によるものかも知れないと初めは思っていた。

あるとき、中国語と日本語を教え合っている劉トンさんが、彼女の大学西安音楽院の民族楽器の演奏会に連れて行ってってくれた。演奏会が終わり、近くの公園に行った。雨上がりで霧がたちこめているような夜の静寂のなかを二人は散歩した。公園の街灯が点っているあたりだけ霧がくっきりと浮かび上がっているのが見えた。先ほどの古典楽器の優雅な演奏会の余韻が残っており、私は思わず叫んだ。

「ロマンチックだね」

「先生、あれはゴミですよ」と劉がいった。



劉さんと疑似恋人同士の気分になっていた私の高揚感を、彼女はつれなくも引きずり落としてしまった。しばらく考えていた私はようやくその意味を理解した。日本語を私から習って間もない語彙力不足の彼女は、それが霧ではなくて『砂塵』が舞っているのだと言いたいのだ。

西安市の生活に慣れてくるに従って、私はこの土地の気候風土への理解が深まった。西安市は黄土地帯の南東部に隣接しているので黄砂が舞っている。また、タクラマカン沙漠からはるばる砂塵が飛来しているのだ。だから、我が教師宿舎の窓辺にはいくら掃除しても一週間も経つと、うっすらと細かい砂塵が溜まる。キャンパス内の樹々は砂塵に覆われて土気色になるので、ときどき散水車が水をかけて樹々の緑を蘇らさなければならないのだ。そして、風の強く吹く日には、晴れの日でも空は曇っており、太陽は黄色く見える。西安市や咸陽市はこんな気候の土地なので、呼吸器系に欠陥のある人には住みにくいと言われている。

王維の詩は、送別の詩として日本にもよく知られているが、送別の詩の主題は第三、四句にある。第一、二句は単なる場の設定、情景描写に過ぎない、と私は日本にいるときには思っていた。が、第一、二句にこの土地の気候風土が見事に織り込まれていることが分かり、私はこの漢詩がますます好きになった。このように、漢詩はそれ自体で日本人にとって十分鑑賞にたえられる内容を持つものであるが、創作の現場に立ち会うことによってますますその味わいが深まるものである。

C 文化の粋を教える教育の日中差

江西師範大では都心から離れた新キャンパスで私は生活していた。ある日、中国語の家庭教師をしてくれた黄誉婷さんと、サイクリングを兼ねて都心のスーパーへ買い物に行った時のことである。とある、街角で自動車修理工場の看板が目にとまった。『〇〇姑蘇修理店』とあった。

私は指差していった。

「あの店の名前は、張継の楓橋夜泊にある名前と同じだね」

すると彼女は直ちに楓橋夜泊を中国語で諳んじた。姑蘇とは蘇州の古名である。

この詩は日本人も大好きだ。私も負けずに日本式で詠ったが、途中で間違えてしまって、悔しい思いをした。この詩に登場する蘇州市の「寒山寺」には3, 4回訪れたことがある。詩に登場する鐘を鳴らす鐘楼もあった。

楓橋夜泊 張継 楓橋夜泊 張継

月落烏啼霜滿天 月落ち烏啼きて霜天に満つ

江楓漁火對愁眠 江楓漁火愁眠に對す

姑蘇城外寒山寺 こそ 姑蘇城外の寒山寺

夜半鐘聲到客船 夜半の鐘聲客船に到る

黄に限らず、なぜ中国人の学生は日本人が知っている漢詩なら、たいていスラスラと暗誦できるのだろうか？ それは政府教育部が、漢詩を世界に誇るべき中国文化の粹であると位置づけて、小学生のときに徹底的に覚えさせる方針を採っているからである。おそらく、家庭で方言しか話さなかった子供に、小学校で共通語（普通話）を覚えさせる国家政策の一部ともなっているのだろう。



鐘楼

五重塔

石碑

一方、日本の学校教育で和歌を小学生に教えるようなこととはないし、せいぜい高校の古文の授業の中に出てくる程度である。私は古文が大嫌いで、大学受験にも役立ちそうにないので和歌には無関心だった。

大学生のときに、教養として『唐詩選』くらい読んだ記憶がある。理科系学部の私でもそうなのに、一方、中国では日

本語科の学生でも日本の和歌を趣味として勉強するようなことは殆どあり得ない。だから、詩については、かなり偏った一方通行の文化交流であると言えるだろう。

D 田園詩人「陶淵明」の故郷九江

九江は長江中流の河岸の町である。陶淵明は四十を超えたころに、小役人生活に見切りをつけて故郷に帰り、悠々自適の田園生活の中で詩をつくった。私は、九江へ行って、陶淵明記念館を見学したが、とりたてて見るべきものがなく、記念館の周辺にも陶淵明の生活ぶりを髣髴とさせるような田園風景がなかった。中国の名所旧跡、記念館の類でも、いつも期待通りとはいかないものである。

彼の代表作のひとつ「飲酒」にある南山とは、廬山のことである。人里近くに住んでいても、心の持ちようで喧騒に煩わされることがないというのだ。



陶淵明記念館

飲酒五 陶淵明

結廬在人境 而無車馬喧
問君何能爾 心遠地自偏
采菊東籬下 悠然見南山
山氣日夕佳 飛鳥相與還
此中有真意 欲弁已忘言

飲酒五 陶淵明

廬を結んで人境にあり 而も車馬の^{かまびす}喧しき無し
君に問う何ぞ能く爾ると 心遠ければ地自ずから偏なり
菊を采る東籬の下 悠然として南山を見る
山氣 日夕に佳く 飛鳥 相^{とも}与に還る
此中に真意あり 弁せんと欲して已に言を忘る

E 廬山

前の詩に出てきた南山、つまり、廬山に李白の詩で有名な「廬山瀑布」がある。私は同行してくれた黄さんと一緒に廬山瀑布を目指して登山した。

この日は早朝からかなり暑く、急傾斜と階段が交互にまじっている坂道を歩き、途中で河原に下りて、冷たい水で汗をふいたりもした。

滝壺の一步前まで来たところで、時間切れのために引き返したが、滝を間近に見ることができたので満足することにした。



望廬山瀑布 李白
日照香炉生紫烟
遥看瀑布挂前川
飞流直下三千尺
疑是银河落九天

廬山の瀑布を望む
日は香炉を照らして紫煙を生ずる
遥かに看る瀑布の前川に挂かるを。
飛流直下 三千尺、
疑うらくは是れ銀河の九天
より落つるか

廬山滞在中に、もう一つ是非見ておきたいものがある。それは、清少納言の枕草子に出てくるエピソード (注) に関わる「香炉峰」である。しかし、現地人に聞いても、白楽天の漢詩にまつわる香炉峰を知っている人がおらず、結局、見ずじまいで廬山を去ることになった。後日、インターネットで調べたら、香炉峰が確かにあったが、私が登山した川沿いの低い位置からは見えないのかもしれない。



(注) 遺愛寺の鐘は枕を^{そばだ}てて聴き
香鑪峯の雪は簾を^{かかひげ}撥て見る

F 湖南省の岳陽

李白の詩にまつわる黄鶴楼を訪ねたら、杜甫の詩に関わるもう一つの楼閣「岳陽楼」を訪れないわけにはいかない。

旅に同行してくれた二人の学生に岳陽楼の最上階で杜甫の「登岳陽楼」と劉禹錫の「望洞庭湖」を朗詠してもらったのは、最高の思い出となった。



コンクリート造りの岳陽楼



登岳陽樓 杜甫 岳陽樓に登る 杜甫

昔聞洞庭水 昔聞く 洞庭の水
今上岳陽樓 今上る 岳陽樓
吳楚東南坼 吳楚 東南に坼け
乾坤日夜浮 乾坤 日夜浮かぶ
親朋無一字 親朋 一字無く
老病有孤舟 老病 孤舟有り
戎馬関山北 戎馬 関山の北
憑軒涕泗流 軒に憑って涕泗流る

杜甫はこれに先立つ数年を、友人のはからいで成都に庵を持ち、安寧の日々を過ごした。しかし、友人の死により、また長江をくだる漂泊の旅に出る。友人知人のいる中原に戻りたくとも、戦乱でそれがかなわない。この数年後に長江下流の地で、病身の杜甫は亡くなった。

G 南宋末の愛国者文天祥

どの民族にも救国に奔走した英雄はいるものだが、その末路は死で終わる。江西省南部の町「吉安」はかつて若者の教育に熱心な地で、科挙合格者を多数輩出したことで知られている。13世紀後半の南宋人、文天祥は20歳にして状元（皇帝の前<殿試>で最優秀の合格）となった秀才であった。しかし、南宋末に元（蒙古軍）の侵略により国家存亡の危機に際して、上級官僚の地位を投げだし、救国の義勇軍を組織し決起したのだ。



吉安市の文天祥記念館

彼は、武運つたなく元軍に捕らえられて獄中にあつたとき、フビライから元王朝に仕えよと求められたが拒否して、結局刑死した。獄中で愛国の熱情をしたためた「正氣の歌」は、幕末の藤田東湖や吉田松陰にも思想的影響を与えたと言われている。

私は江西師範大に赴任していたとき、南昌市から列車で三時間ほどの吉安市にある文天祥記念館を訪れた。「生氣の歌」は五言六十句からなる長文であり、記念館の壁に記してあるはじめの部分の写真を下に示す。

若くして科挙制度の最高峰「状元」になった文天祥は、己の立身出世のみを考えていれ



ば、上手な世渡りができていただろうに、救国の熱意に燃える彼にはそれができなかった。

昨今の日本の高級官僚の不祥事を見ていたら、文天祥との人品の大きな差を感じざるを得ない。

いや、それは言い過ぎかもしれない。中国共産党政府は、文天祥を高く評価しており、中国の数か所に文天祥記念館があるという。

しかし、現代中国の汚職まみれの高級官僚（共産主義者）に、文天祥と同じ志を抱く者が何人いるだろうか？

H 言葉の響きの快さ

劉廷芝作「代悲白頭翁」は、洛陽の巷の花は毎春同じように咲くが、それを愛でる人は同じではない、という無常観を謳いあげている。漢詩には、このような詩の内容がまず重要であるが、同時に漢字音の平仄を組み合わせる独特の響きを生み出す詩としての韻律美も大切である。しかし、中国語を知らない殆どの日本人には、漢詩の韻律美が分からない。

それが分からなくても、この詩のように、「飛び来たり」「飛び去る」や「年年歳歳」「歳歳年年」、「紅顔の子」「白頭翁」のような対句の妙があり、日本語書き下し文で朗詠しても快い響きを感じ取ることができる。

代悲白頭翁 劉廷芝 白頭を悲しむ翁に代って 劉廷芝

洛陽城東桃李花	洛陽城東 桃李の花
飛來飛去落誰家	飛び来たり飛び去って誰が家にか落つ
.....
年年歳歳花相似	年年歳歳 花相似たり
歳歳年年人不同	歳歳年年 人同じからず
.....



インターネットより

I 民族が心を一つにできる共有財産

江西師範大学には、クリスマス晩会とか新年会だとか、日本語科の教師や学生が一堂に集う演芸会があった。こんな時には、日本人教師は必ず何か芸を披露しなければならな

い。この大学赴任三年目には、安曇野の早春の情景を描いた「早春賦」を歌うことにした。しかし、ただ歌うだけでは芸がなさすぎる。

そこで、一、二番を日本語の歌詞どおりに歌い、三番で、杜牧の「清明」を中国語で歌うことにした。

I

春は名のみ 風の寒さや
谷のうぐいす 歌は思えど
時にあらずと 声もたてず
時にあらずと 声もたてず

II

氷融け去り 葦はつのぐむ
さては時ぞと 思うあやにく
今日も昨日も 雪の空
今日も昨日も 雪の空

III 清明 杜牧

清明時節雨紛紛 清明の時節 雨 紛紛

路上行人欲斷魂 路上の行人 魂を断たんと欲す

借問酒家何處有 借問^{しやもん}す 酒家は何れの処に有るか

牧童遙指杏花村 牧童 遙かに指さす 杏花の村



中国語の発音の中でも特に難しいのが四声である。中国語の家庭教師から特訓を受け、本番でインターネットからダウンロードしたメロディをバックに歌ったところ、拍手喝采をうけた。特に、三番を『清明』の詩で歌ったのがよかったようだ。

これに気をよくした私は、

「では次に、清明を朗詠します」

と、言ったが、やはり発音にはちょっと不安があった。が、はじめた途端、そんな不安は無用だった。会場につめかけた学生百数十人が一斉に大声で唱和したのである。

中国人が自国の文化遺産を共有して、心を一つにした瞬間だった。かつての毛沢東語録や国家の指導で作りに上げたスローガンなどは、時代の流れのなかで廃れる運命にある。しかし、漢詩だけは中国の民衆の中で廃れることもなく生き続けることであろう。それは素晴らしいことではないか！ と同時に、世界に二百あまりの国家地域がある中で、発音こ

そ異なれ漢字という文字媒体を共有している日本人だけが、漢詩を今も愛し続けている。それも、日本人として誇るべきことであると思う。

なお、漢詩紀行地図では、杜牧が「泊秦淮」「江南の春」「清明」を作詩した土地は「南京市」と書いた。しかし、「江南の春」「清明」は彼が二十代後半に洪州（江西省南昌）で創ったとの説もある。いずれにしてもこの三作は江南地方（長江デルタ地帯）であることは間違いない。

J 日本の漢詩

最後に日本人による名作漢詩をひとつ紹介しよう。

日露戦争で最大の激戦地旅順 203 高地を巡って日露の戦いがあった。乃木大将は、ただひたすら兵卒に突撃させては、敵の砲撃・銃撃を受ける消耗戦術をもちいたために、累々たる屍の山がきずかれた。

が、ついに明治 37 年 12 月 5 日に、203 高地を占領した。若くして散った英霊の中には乃木の次男保典の名もあった。それを嘆じて詠んだ漢詩が「爾靈山」であり、二〇三高地を語呂合わせした当て字で、乃木大将の創作。



乃木大将

爾靈山 乃木希典 爾靈山 乃木希典

爾靈山嶮豈攀難 爾靈山は嶮なれども豈攀難からんや

男子功名期克艱 男子の功名克艱を期す

鐵血覆山山形改 鐵血山を覆いて山形改まる

萬人齊仰爾靈山 万人齊しく仰ぐ爾靈山

なお、漢詩の話題は「南昌編 5 漢詩四方山話」にも類似の記載がある。